

江戸期在村医の製売薬

—岡山県邑久郡中島家の関連文書の分析から—

梶谷 真司

東京大学大学院総合文化研究科

岡山県邑久郡の中島家（現当主・医門9世 中島洋一氏）は、江戸時代から続く医師の家系である。代々書かれてきた文書や器物、書籍、掛け軸や書簡など、多くの資料が今に伝わり、近世から近代にかけての医家による地域医療のあり方、その変化をさまざまな角度から明らかにすることができると思われる。

これまでに資料の整理も進み、目録も徐々に完成に近づいている。またここ数年、この中島家文書に関する学会発表や論文公刊も続き、次第に研究が積み重ねられている。例えば、論文では、松村紀明・中島洋一「中島宗仙の「筑紫行雑記」について～文政二年一医師の長崎遊学日記」（『日本医史学雑誌』第54号（4）2008）、中島洋一「中島友玄の京都遊学日記（1）～（3）」『医譚』第89～91号（2008～2009）がある。また、昨年の佐賀大会でも、中島洋一・木下浩「中島友玄の「種痘諸事留」～岡山県邑久郡における幕末～明治初期の種痘施行の変遷」の発表が行われた。

中島家歴代の医者の中にも、4代目の友玄は、ことのほか几帳面だったようで、上述の論文で取り上げられている京都遊学以外に、家系、診療・治療、回生術、製薬・売薬、種痘など、多岐にわたる詳細な記録を文書として多く残している。今回の発表では、そのうち製売薬に関わる資料を取り上げる。このジャンルの文書としては、「売薬処方録」（1842～1844）、「売薬諸事記」（1843）、「売薬銀札請取覧」（1844）、「売薬弘所姓名録」（1844～1846）などが挙げられる。さらに、薬箱や薬筆筒、薬研などの道具類、上記文書に記載されている薬の広告・能書の版木100点あまりが残されており、これらも中島家の製売薬を知るうえで重要であり、上に挙げた文書の解読に大いに役立てることができる（版木からは名前だけで判断できない薬の効用や値段が分かる）。

さて、これらの資料を見ると、友玄がたんに医療のみならず、薬の製造と販売も精力的に行っており、それがたんなる副業のレベルを超えたものだったことが伺える。実に80種類以上の多種多様な薬を作り、かなり広い地域にまで普及させていたようである。資料からは、どんな薬をどれだけ売っていたかが分かり、当時のこの地域の人々が日常的にどのような症状・病気の薬を求めていたのかを推察できる。また、販売に当たっては、各地に弘所（取次店）を置いていたようで、その場所から薬を売っていた地理的な広がりも把握できる。さらに、弘所へは土産をもたせて使いの者を派遣していたらしく、文書には土産物の種類や、使いの者への手当てや旅費、その他諸々の雑費が記されており、中島家の売薬のいわば「経営形態」まで知ることができる。

江戸時代の売薬については、専業の薬屋のことは資料も多く、細かいことまでよく分かり、研究も多くなされているが（特に富山の置き薬のような特徴的な売薬業）、医者、それも村落という地域共同体で活動する医者が製薬や売薬とどのように関わっていたかを示す資料はあまりない。時期的にはわずかな数年間に限定されているとはいえ、中島家の資料は、医家の製売薬の実態を具体的・立体的に示すさまざまなデータを含んでおり、その意味でもきわめて価値が高いと言える。